

【ブック・レビュー】

萩原宜之著

『ラーマンとマハティール』

(現代アジアの肖像 14)

岩波書店, 1996 年

いし だ あきら
石 田 章

1

アジアにとって、20 世紀は激動の時代であった。欧米列強諸国・日本による植民地支配、革命、独立、内戦などの苦難の連続であった。アジア各国の指導者たちは、かかる状況に如何に対処し、近代国家の建設を推進していったのであろうか。シリーズ「現代アジアの肖像」はアジア 11 カ国 1 地域の指導者を取り上げ、彼らの人間像の描写を通じて、この問題に答えることを目的としている⁽¹⁾。

本書は、同シリーズの第 14 巻として刊行された。最近急速な経済発展を遂げるマレーシアは、マレー人・華人・インド人などから成る複合人種国家である。人種間の対立と妥協という複雑な構図の中で、マレーシア（マラヤ）政府は、ゴムと錫のモノカルチャー経済から先進工業国への転換を図ってきた。マレーシアの指導者たちは、経済的に劣位にある先住民のマレー人を優遇するのか、それとも人種間の調和（racial harmony）を図るために積極的差別是正措置（affirmative action）を放棄するのか、という二者択一を常に迫られてきた。本書は、二人の対照的なマレー人政治家——民族融和主義者の初代首相ラーマンとマレー人優先主義者の四代首相マハティール——の対比を通じて、マレーシアが民族融和からマレー人優先へと政策方針を転換してきた苦悩に満ちた歴史を平易に述べている。

なお、本書の構成は以下の通りである。

- 第一章 イギリス植民地支配下のマラヤ
- 第二章 マラヤのナショナリズム
- 第三章 日本の南進とマラヤ
- 第四章 UMNO とマラヤ連邦の独立
- 第五章 ラーマン＝ラザク体制とマレーシア結成
- 第六章 五月一三日事件とラーマンの退陣
- 第七章 ラザク政権とブミブトラ政策
- 第八章 フセイン政権とダーワ運動の展開
- 第九章 マハティールの登場と挑戦
- 第十章 EAEC と WAWASAN 2020

2

ごく簡単に本書の内容を要約しておこう。

第一章から第四章では、イギリスの植民地支配とマラヤ連邦の独立について簡単な説明がなされている。19 世紀以降のイギリス植民地時代に、ゴムと錫のモノカルチャー経済と、錫鉱山やゴム園労働者として華僑・インド人が来住したことによってマレー人・華人・インド人から成る複合人種社会が形成された。主にマレー人は農業に従事していたのに対し、華人は商工業に進出したことから、徐々に両人種間の経済格差が拡大した。第二次大戦後、マラヤの政治家たちが人種別か多民族統合型の政党かを模索していたが、ラーマンが結成した人種別に構成された複合の政党の連合（Alliance）が最大勢力となった。以後、マラヤ・マレーシアにおいて、マレー人政党を主導とした各人種別の政党の連合が政権を担うことになった。

第五・六章においては、マラヤ連邦の独立（1957 年）から 1970 年までのラーマン政権下の動向が扱われている。民族融和主義者のラーマンは、マレー人の所得水準の向上を図ったが、それが農業部門に限定されていたことから、マレー人は華人と欧米人が独占していた商工業部門に参入できず、結果的にマレー人と華人の経済格差は解消されなかつ

た。また、経済的に優位に立つ華人も、国語問題やマレー人に賦与された特権に対する反発を強めていった。かかる状況下において、両者の対立感情が一気に表面化し、1969年のマレー人と華人間の抗争事件（5・13事件）へと発展していった。

第七・八章では、1971年からマハティール政権が誕生する1981年以前の、二代首相ラザクと三代首相フセインによるマレー人優遇政策の展開が述べられている。華人と比べて経済的に劣位にあった最大多数派のマレー人の不満を鎮静化させるために、雇用、教育、補助金給付などの諸点においてマレー人を優遇した新経済政策が1971年に導入された。同時に、与党連合は、体制内に野党を取り込むことによって国民戦線（Barisan Nasional）を結成し、国内政治の安定化を図った。マレー人優遇政策を推進した両首相の下で、ラーマンの民族融和主義を辛辣に批判したため失脚していたマハティールは、再度政界への復帰を果たし、次第に重用されるようになっていった。

第九・十章においては、マハティール政権下の外交・内政が詳細に論じられている。同首相の主な功績として、(1)アジア的価値観を重視したルックイースト政策・東アジア経済協議体（EAEC）構想の展開、(2)民営活力の導入、(3)スルタン・国王の権限縮小による行政制度の近代化、(4)イスラム勢力の体制内への取り込みによる政治的安定の確立などがある。この反面、マレー人優先によって助長された金権政治、言論の自由の制限、マレー人優遇政策の実施にも拘らず未だに解消されないマレー人絶対的貧困層の存在、同政策下において経済発展の恩恵に浴さなかった華人・インド人中下層の不満がある。

3

通読しての感想として、次の3点を述べて

おきたい。

まず最初に指摘すべきことは、本書では、民族融和主義者のラーマンとマレー人優遇政策を唱道・実践してきたマハティールという全く対照的な二人の政治家の対立を軸に、マレーシア近現代史におけるマレー人と華人間の複雑な対立と妥協の構図が平易に解説されている点である。我が国において、初代首相ラーマンの知名度は相対的に低く、シリーズ「現代アジアの肖像」の中でももっとも影の薄い存在である。しかし、1971年以降に導入されたマレー人優遇政策の策定過程を理解する上で、1960年代に民族融和的な政策を唱道・実践したラーマンに言及しないのは不適当であろう。この意味において、ラーマンをマハティールと同等に位置づけている本書は、現在も引き続き実践されているマレー人優遇政策を理解する上で、非常にバランスのとれた優れた入門書となっている。

第2に、本書は、ラーマンとマハティールの生い立ちと彼らの政治哲学・理念をイギリス植民地時代以降の近現代史の展開と絡めつつ、ビビッドに叙述している。ラーマン或いはマハティールという一政治家の「伝記物」は既に多数出版されているが、本書のように二人をマレーシア史の流れの中で把握しているものは少ない。「伝記物」が有する「読み物」としての面白味を損なうことなく、マレーシア政治史における両者の位置づけを明確にした本書は、かなり読みごたえがある。

第3に、我が国におけるマレーシア政治研究の第一人者である著者は、マレーシア人から見たマハティール像を見事に描き切っている。我が国においては、同首相の辛辣な欧米批判から、アジア中心主義者・アジアの代弁者としての印象が強い⁽²⁾。このような印象を持つ多くの読者にとって、本書は、新鮮なマハティール像を提供してくれよう。

マハティールの年齢（1925年生まれ）と健康状態を考慮すれば、彼が現在の任期を終え

る2000年までに一線を退く可能性が極めて高い。人種間の調和というマレーシア建国以来の、そしてラーマンとマハティールですら達成しえなかった課題に、アヌワルを中心とした次世代のマレー人政治家たちはどのように対処していくのであろうか。種族間よりも種族内の経済格差が顕在化しつつある状況下において、国内の政策運営は、今後より一層困難になっていくと推察される。同国の近現代政治史の理解の深化のみならず、マハティール後のマレーシアの未来像を描く上でも、本書は大いに役立つと察せられる⁽³⁾。マレーシアの研究者のみならず、アジア特にマレーシア・シンガポールに関心のある方にも、ぜひとも一読をお勧めしたい。

注(1) シリーズ「現代アジアの肖像」の中で取り上げられている人物は、以下の通りである。孫文と袁世凱（一卷）、蔣介石と毛沢東（二巻）、張学良（三巻）、鄧小平（四巻）、蔣経国（五巻）、金日成と金正日（六巻）、李承晩と朴

正熙（七巻）、ガンディー（八巻）、ビブーンとプリディ（九巻）、ホー・チ・ミン（十巻）、スカルノとスハルト（十一巻）、マルコス（十二巻）、アウン・サン（十三巻）、ラーマンとマハティール（十四巻）、リー・クアン・ユー（十五巻）。

- (2) 例えば、堀内降彦『マハティール——アジア復権の希望』（亜紀書房、1994年）；根津清『マハティール——アジアの世紀を創る男』（ザ・マサダ、1994年）を参照されたい。
- (3) マレーシアの政治については、萩原宜之『マレーシア政治論——複合社会の政治力学』（弘文堂、1989年）；金子芳樹「マレーシア華人政治の構造と動態——独立から六九年『人種暴動』に至る政治過程——」（『アジア研究』38巻4号、1992年）などを参照のこと。マハティールに関心のある読者には、1995年11月に、日本経済新聞に連載されたマハティールの自叙伝「私の履歴書」を読まれることをお勧めする。なお、最近の政治動向に関しては、鳥居高「変貌するマレーシア政権党」（『アジア研ニュース』1994年5月号）が大変参考となろう。